

チーム	A
テーマ	Q2：組織の問題点を指摘事項として顕在化して持ち帰ることができるか？
議事録	<p>サプライヤーにおける品質課題の原因として、サプライヤーに提供している支給品（資材、機材等）が不十分である場合や、サプライヤーに要求している製品の仕様が難しいことに起因しているケースがある。</p> <p>これらの問題は複数のサプライヤーで共通しているケースもある為、課題解決に向けたアクションとして自社プロセスに焦点を当てて改善を促進する以下のようなアプローチが必要。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発注元（自組織）の課題について、協働の姿勢を示してサプライヤーから情報を聞き出す。 ・ビジネスパートナーとしての立場を前提として、強制的に監査を実施したりせず協力的に教育又は指導を行う。 ・監査のみならず、日ごろのコミュニケーションを通じて問題点や課題を聞きだせる関係性が必要。

チーム	B
テーマ	Q1.サプライヤー監査員による指摘事項のバラツキを少なくする方法は？（→Q3）
議事録	<p>サプライヤー監査において、監査ポイントのばらつきを防止する為に、定型のチェックシートを使用しているケースが多いが、主に監査員の力量（性格や経験など）の差によってスコアリング（点数付け）のバラつきが生じる傾向がある。</p> <p>指摘事項のバラつきを減らす為には、力量の標準化や判断基準の共有などを目的として、以下のような手段が考えられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実際の審査において、OJTを通じてリーダーの力量を継承するためのトレーニング方法を導入する。 2. 模擬監査を通じて判断の基準や方法に関わる学習機会の設定 3. 監査結果を共有、評価し、フィードバックする仕組みの導入

チーム	C
テーマ	Q1.サプライヤー監査員による指摘事項のバラツキを少なくする方法は？（→Q3）
議事録	<p>サプライヤーのパフォーマンス指標を事前に分析し、サプライヤ各社の課題・リスクに基づく監査準備を実施した上で監査の手法や仕組みについて、文書化などによりチームで意思統一させる工夫をすることで監査ポイントのバラつきを防止する。</p> <p>営業出身の人材をサプライヤー監査に当てることで、予めコミュニケーション基盤を持つ担当者を通じて現場の情報を引き出す役割が実現している。</p> <p>また月に1回の監査レビュー会議を実施して、全体のすり合わせや評価の見直しなどを行うことによってバラつきを減らす取り組みを実施</p> <p>サプライヤーの企業文化にも着目して、監査結果を相互理解できるように努めることも肝要。</p>

チーム	D
テーマ	Q2：組織の問題点を指摘事項として顕在化して持ち帰ることができるか？
議事録	<ul style="list-style-type: none"> ・リスク/トラブルが顕在化していると組織に持ち帰らざるを得ず、対策を協議するステージでは課題に応じて自組織で協力が必要な部門も変わってくる為、自社内の協力体制を構築するネットワークとコミュニケーション力が監査員に求められる。 ・具体的な協力を請先は、経理や経営企画、購買などの他、設計に起因する問題も多いため、設計部門まで広く連携が取れる体制があることが望ましい。 ・監査側のみならず、被監査側も幅広く協力しないと、根本的な要因に辿り着かず有効な対策の実施に至らない為、工程内の詳細情報を提供してもらう為にサプライヤー内部との関係構築が必要。

チーム	E
テーマ	Q3：サプライヤー監査員の役割を果たす為に必要な力量は？
議事録	<ul style="list-style-type: none"> ・サプライヤー監査は外部提供者のプロセス理解や技術工程の理解（経験年数や役職経験）のみで選ばれていることが多い。 ・有効なサプライヤー監査の技法（プロセスの深掘りや事実情報を引き出す能力）を評価、または養成するプロセスが必要。 ・サプライヤー監査は内部監査との協力体制を構築することが求められる。 ・QCDに基づく、優れたプロセスを評価する為の着眼点を幅広く持った監査チームを編成を行い、戦略に基づく監査目的など、意識共有を進めて監査に望むことが重要。